

## テトスへの手紙

テトス 1:1-4

- 01 神のしもべ、イエス・キリストの使徒パウロから。——私<sup>わたし</sup>が使徒<sup>しと</sup>とされたのは、神<sup>かみ</sup>に選ばれた人々<sup>ひとびと</sup>が信仰<sup>しんこう</sup>に進み、敬虔<sup>けいけん</sup>にふさわしい、真理<sup>しんり</sup>の知識<sup>ちしき</sup>を得るため、
- 02 それは、偽<sup>いつわ</sup>ることのない神<sup>かみ</sup>が永遠<sup>えいえん</sup>の昔<sup>むかし</sup>から約束<sup>やくそく</sup>してくださった、永遠<sup>えいえん</sup>のいのちの望<sup>のぞ</sup>みに基づくものです。
- 03 神<sup>かみ</sup>は、定められた時<sup>とき</sup>に、みことばを宣教<sup>せんきょう</sup>によって明らか<sup>あき</sup>にされました。私<sup>わたし</sup>はこの宣教<sup>せんきょう</sup>を、私<sup>わたし</sup>たちの救<sup>すく</sup>い主<sup>ぬし</sup>である神<sup>かみ</sup>の命令<sup>めいれい</sup>によって委<sup>ゆだ</sup>ねられたのです——
- 04 同じ信仰<sup>しんこう</sup>による、真<sup>まこと</sup>のわが子<sup>こ</sup>テトスへ。父<sup>ちち</sup>なる神<sup>かみ</sup>と、私<sup>わたし</sup>たちの救<sup>すく</sup>い主<sup>ぬし</sup>キリスト・イエスから、恵<sup>めぐ</sup>みと平安<sup>へいあん</sup>がありますように。

いつも柳<sup>りゅう</sup>先生<sup>せんせい</sup>が言<sup>い</sup>われるのは、学院福音化<sup>がくいんふくいんか</sup>の内容<sup>ないよう</sup>は、単<sup>たん</sup>にテキストをそのまま伝<sup>つた</sup>えるのではなく、多<sup>おほ</sup>くの時間<sup>じかん</sup>、集<sup>しゅう</sup>中<sup>ちゅう</sup>して深<sup>ふか</sup>く黙<sup>もく</sup>想<sup>そう</sup>してフォーラムを分<sup>わ</sup>かち合<sup>あ</sup>うようにということです。深<sup>ふか</sup>いフォーラムができるようにするためには、その内容<sup>ないよう</sup>全体<sup>ぜんたい</sup>をよく理解<sup>りかい</sup>することが重<sup>じゅう</sup>要<sup>よう</sup>です。このテトスへの手紙<sup>てがみ</sup>は、1章<sup>しょう</sup>から3章<sup>しょう</sup>までですから、はやく読<sup>よ</sup>めば、全<sup>ぜん</sup>部<sup>ぶ</sup>読<sup>よ</sup>むのに4分<sup>ふん</sup>ぐらいで読<sup>よ</sup>めます。皆<sup>みな</sup>さん、ぜひ、読<sup>よ</sup>んでください。必要<sup>ひつよう</sup>ならば、インターネット<sup>とのお</sup>を通してテトスへの手紙<sup>てがみ</sup>に関する<sup>かん</sup>内容<sup>ないよう</sup>を探<sup>さが</sup>して手紙<sup>てがみ</sup>の背景<sup>はいけい</sup>や、その後<sup>ご</sup>の話し<sup>はなし</sup>について調<sup>しら</sup>べてみてください。

### <テトスについて>

テトスへの手紙<sup>てがみ</sup>は、他<sup>ほか</sup>のパウロの書簡<sup>しょかん</sup>とは違<sup>ちが</sup>い、受<sup>う</sup>け取<sup>と</sup>る人<sup>ひと</sup>がテトスというひとりの個人<sup>こじん</sup>です。そして、その中<sup>なか</sup>でテトスを「真<sup>まこと</sup>のわが子<sup>こ</sup>テトス」と書<sup>か</sup>いています。

パウロの書簡<sup>しょかん</sup>の中<sup>なか</sup>には、13回<sup>かい</sup>ほどテトスという名前<sup>なまえ</sup>が書<sup>か</sup>かれています。コリント人<sup>びと</sup>への手紙<sup>てがみ</sup>第二<sup>だいに</sup>では、テトスは「兄弟<sup>きょうだい</sup>」(2:13)また、「私<sup>わたし</sup>の仲間<sup>なかま</sup>であり、同<sup>どう</sup>労<sup>ろう</sup>者<sup>しや</sup>」(8:23)だと紹<sup>しょう</sup>介<sup>かい</sup>しています。新<sup>あたら</sup>しい聖<sup>せい</sup>書<sup>しょ</sup>にはきょうだい<sup>きょうだい</sup>でテトスと書<sup>か</sup>いてあります。

### II コリント 2:13

私<sup>わたし</sup>は、兄弟<sup>きょうだい</sup>テトスに会<sup>あ</sup>えなかったので、心<sup>こころ</sup>に安<sup>やす</sup>らぎがありませんでした。それで人々<sup>ひとびと</sup>に別<sup>わか</sup>れを告<sup>つ</sup>げて、マケドニア<sup>む</sup>に向けて出<sup>しゅ</sup>発<sup>ぱつ</sup>しました。”

### II コリント 8:23

テトスについて言<sup>い</sup>えば、彼<sup>かれ</sup>は私<sup>わたし</sup>の仲間<sup>なかま</sup>であり、あなたがたのために働<sup>はたら</sup>く同<sup>どう</sup>労<sup>ろう</sup>者<sup>しや</sup>です。私<sup>わたし</sup>たちの兄弟<sup>きょうだい</sup>たちについて言<sup>い</sup>えば、彼<sup>かれ</sup>らは諸<sup>しよ</sup>教<sup>きやう</sup>会<sup>かい</sup>の使<sup>し</sup>者<sup>しや</sup>であり、キリストの栄<sup>えい</sup>光<sup>こう</sup>です。

テトス 1:4 のみことばでは、「同じ信仰<sup>しんこう</sup>による<sup>による</sup>」書<sup>か</sup>いてあります。このことばは、パウロがイエス・キリストの御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>を宣<sup>のたま</sup>へ伝える<sup>うつ</sup>器<sup>め</sup>として召<sup>め</sup>されたのと同じように、テトスも同じくキリストの福<sup>ふく</sup>音<sup>いん</sup>を宣<sup>のたま</sup>へ伝える<sup>はたら</sup>き働<sup>はたら</sup>きに、ともに召<sup>め</sup>された者<sup>もの</sup>だという意味<sup>いみ</sup>です。そのように同じ信仰<sup>しんこう</sup>によって、兄弟<sup>きょうだい</sup>、わが子<sup>こ</sup>になったということです。わが子<sup>こ</sup>として、ときには兄弟<sup>きょうだい</sup>として、ときには同<sup>どう</sup>労<sup>ろう</sup>者<sup>しや</sup>としてです。

だれでも、神様のみこころを行う者が、わたしの兄弟、姉妹、母なのですとイエス様がマルコ 3:35 で言われたことばが理解できるでしょう。

マルコ 3:35

「だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」

マタイの福音書では、この世で兄弟姉妹をまた親を捨てた者は、その 100 倍の祝福を受けるというみことばもあります。これは、皆さんの親や子ども、兄弟をすべて無視して、捨て去らなければならないと言っているではありません。ひとりの父に仕える、すべてが兄弟であり、子ども、親になるということです。

私も個人的に私が父として敬っている方が何人かいます。また、私を息子と表現してくださる方も何人かいます。それは、すべて同じ信仰によって、一つの家族となったということです。



### クレタについて

地中海に位置しているこのクレタ島は、「クレタ人はいつも嘘つき」ということばがあるぐらい、偽りと不道徳が蔓延していたところでした。

12節を見ましょう。

テトス 1:12

クレタ人のうちの一人、彼ら自身の預言者が言いました。「クレタ人はいつも嘘つき、悪い獣、怠け者の大食漢。」

もっと深刻だったのは、テトスが牧会していたクレタ教会の中にも、偽りの教師たちが偽りの教えを広めていたということです。ですから、正しい信仰観を定めることが、とても至急な所でした。

テトスへの手紙に書いてあるように、信仰の正しい生活を見つけることが難しいほど道徳的にも悪いことが広まっている所でした。その背景については、皆さんが調べてみてください。

そのような所で牧会の働きをしていたテトスに、パウロは、クレタの人々の悪いところを指摘するとともに、まことの福音を持った者としての信仰生活、また社会生活についての、いろいろな規律を提示して、励まし、また勧告している内容が、このテトスへの手紙です。

それゆえ、テモテへの手紙第一、第二とともに、このテトスへの手紙は牧会書簡と呼ばれています。  
今日は、ともに各章の内容を簡単にまとめてみます。また、テトスへの手紙に現れた福音のみことばを深く黙想していきたいと思ひます。

## 1章

まず、一章では、パウロがテトスをクレタ島の牧会者として立てた目的と、そして、その牧会の働きの重要な核心を5節に記しています。

### テトス 1:5

私があなたをクレタに残したのは、残っている仕事の整理をし、私が命じたとおりに町ごとに長老たちを任命するためでした。

教会は、キリストを頭とした一つの体として立てられるためには、職分者を良く立てることが必須であり、とても重要であったので、職分者の条件について話しています。その内容は、6節から9節にあるので、皆さん、よく目を通して見てください。

- 06 長老は、非難されるところがなく、一人の妻の夫であり、子どもたちも信者で、放蕩を責められたり、反抗的であったりしないことが条件です。
- 07 監督は神の家を管理する者として、非難されるところのない者であるべきです。わがままでなく、短気ではなく、酒飲みでなく、乱暴でなく、不正な利を求めず、
- 08 むしろ、人をよくもてなし、善を愛し、慎み深く、正しく、敬虔で、自制心があり、
- 09 教えにかなった信頼すべきみことばを、しっかりと守っていなければなりません。健全な教えをもって励ましたり、反対する人々を戒めたりすることができるようになるためです。

重職者のみなさんの中で、この条件すべてがよく当てはまる重職者はいますか。少し厳しいかもしれませんが、このような条件を備えなければならないという重要な理由が9節に書いてあります。教会の中には、いつも反対する人々がいるからです。そのような人々のために健全な教えを伝え、ときには戒めたりするためにということです。ですから、教会の長老や、また監督というような指導者たちが、まず正しい福音のみことばで教えを受けなければならないと言っています。また、生活も、福音にふさわしい、神の子どもらしいアイデンティティを持った者として、模範となる姿を見せるべきだと言っているのです。信仰と生活が全くかけ離れてはいけないということです。

それなら、ここで言っている健全な教えとは何でしょうか。  
その内容が2章と3章に記されています。

## 2章

パウロは、まず2章で、教会内の各階級の人々に、思慮深くあるようにと言っています。どのように階級を分けたのかを見てみましょう。

- 02 年配の男の人には、自分を制し、品位を保ち、慎み深く、信仰と愛と忍耐において健全であるように。
- 03 同じように、年配の女の人には、神に仕えている者にふさわしくふるまい、人を中傷せず、大酒のとりこにならず、良いことを教える者であるように。
- 04 そうすれば、彼女たちは若い女の人に、夫を愛し、子どもを愛し、
- 06 同じように、若い人には、あらゆる点で思慮深くあるように勧めなさい。
- 09 奴隷には、あらゆる点で自分の主人に従って、喜ばれる者となるようにし、口答えせず、

2節には「年配の男の人」、3節には「年配の女の人」、4節には「若い女の人」、6節は「若い（男の）人」（原語には男の人を書いてあります）9節には「奴隷」。このように性別、年齢、そして階級によって分けて、どのように対処しなければならないのかということを書いてあります。

各階級がぶつかっている状況で、何に気をつけなければならないかという内容を書いたのです。先ほど言ったようにこのクレタ島は、とても不道徳で、性的に墮落していました。なぜ、そのようにしなければならないのか2章11節にその理由を記しています。

11 実に、すべての人に救いをもたらす神の恵みが現れたのです。

このように神様の恵みを受けた者は、どのような生き方をするようになったのでしょうか。

12節から14節を見ましょう。

12 その恵みは、私たちが不敬虔とこの世の欲を捨て（過去）、今の世にあって、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、（現在）

13 祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるイエス・キリストの、栄光ある現れを待ち望むように（未来）教えています。

12-13節に、過去、現在、未来、すべての問題が終わったと書いてあります。それゆえ、キリストはすべての問題の解決者です。私たちは、そのような者になったことを信じます。

それなら、私たちは、どのように神様の救いの恵みを受け、過去、現在、未来の問題から解放され、まことの自由な者になったのでしょうか。

14 キリストは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心な選びの民をご自分のものとしてきよめるため、私たちのためにご自分を献げられたのです。

14節にあるように、イエス・キリストの十字架の贖いによってです。これが福音です。

これこそが、パウロが語っている「健全な教え」です。これをまず先に学び、それを語り伝える職分者を立てるべきだと言っています。

### 3章

3章でも、福音の核心について説明しています。

救いの出発は罪から始まります。私が罪人であることを先に知り、その罪が何であるのかを知る、そこから始めなければなりません。

3節を見ます。

テトス 3:3

私たちが以前は、愚かで、不従順で、迷っていた者であり、いろいろな欲望と快樂の奴隷になり、悪意とねたみのうちに生活し、人から憎まれ、互いに憎み合う者でした。

これは他の人のことではなく、私のことなのです。私たちは、みんなクレタの人と全く違う、そのような者ではありません。

旧約に出てくる人物1人を例に見ましよう。ソドムとゴモラの滅亡のときに、そこで生き延びたロトと娘たちがいます。皆さんがよくご存知のように、このロトという人は、自分の欲望のままに生きていました。創世記19:1を見ると、御使いたちがソドムに着いたとき、ロトはソドムの門のところの座っていたと書いてあります。門のところに座っていたということは、ソドムとゴモラの時代にも、全ての判断を下すことができる権威を持っていたということです。そのようなソドムとゴモラが滅ぼされるとき、ロトは救い出されます。その内容は創世記19:29からあります。

29 神が低地の町々を滅ぼしたとき、神はアブラハムを覚えておられた。それで、ロトが住んでいた町々を滅ぼしたとき、神はロトをその滅びの中から逃れるようにされた。

神様はアブラハムを覚えておられ、ロトを救い出してくださったのです。アブラハムは何をしたのでしょうか。5回も神様に祈って、神様の心を変えたでしょう。「義人50人いたら、滅ぼしますか。45人いたら 40人いたら 30人いたら」と言って、最後には「10人まで」誰もいませんでした。しかし、そのアブラハムの祈りを、アブラハムを覚えておられ、ロトを生かしてくださったのです。

そのように、私たちのためにとりなしてくださる一人イエス・キリストによって私たちを生かしてくださったのです。私たちが生きている、この場所がソドムとゴモラです。滅亡するしかない、エジプトであり、バビロンです。そこから、私たちを救い出してくださったのです。

イザヤ 53章 12節に、イエス様のとりなしの内容が出ています。

イザヤ 53:12

それゆえ、わたしは多くの人を彼に分け与え、彼は強者たちを戦勝品として分かち取る。彼が自分のいのちを死に明け渡し、背いた者たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする。

イエス様が、私たちと同じ罪人のようになって、死んでくださったのです。そして、とりなしをしてくださいます。

このクレタ島の人たちのように、私たちはみんな、自分の欲望のままに不道徳な状態で罪を犯して生きてきました。そのような私たちに神様のいつくしみと愛が、他の人たちより少しだけ早く現れただけなのです。

テトス 3:4-7

- 04 しかし、私たちの救い主である神のいつくしみと人に対する愛が現れたとき、
- 05 神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いをもって、私たちを救っていただきました。
- 06 神はこの聖霊を、私たちの救い主イエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。
- 07 それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みを抱く相続人となるためでした。

これは、パウロが書いたローマ人への手紙の全体の主題でもありました。ローマ人への手紙だけではなく、パウロが書いたすべての書簡で語られている主題です。

「義人は信仰によって生きる」

救いは、イエス・キリストを信じる信仰による義、それ以外のどんなことによっても、どの方法によっても得ることができないのです。

イエス・キリストを信じることによって、そのイエス様の義を私たちに転嫁してくださったのです。それゆえ、私たちは義人とされました。それ以外には、どんなことも、どんな方法も、私たちに救いを得させることはできません。

テトス 3:5にあるように、私たちの行いによるものでないということを知ってください。

このような脈絡で、2章14節、そして3章8節に記されている「良いわざ」とは、私たちから出てくる行いによってではないということを知ることができるでしょう。「良いわざ」については、以前の学院福音化のエペソ人への手紙とピリピ人への手紙で語っているので、それを参考にしてください。

結論です。

テトスへの手紙は、単に教会を正しく立てるために、どのように職分者を立てるべきか、また、信じる者たちが教会の中で、この世の中での生活が、どうすべきかを教えるための、牧会書簡ではありません。牧師であっても、宣教師であっても、重職者であっても、すべてがキリストの弟子として、ただイエス・キリストと十字架と愛を伝える、福音の専門宣教師であるということを悟らせてくださる、神様のみことばなのです。